

学校体育の武道における生徒の意識について

—楽しさ、嫌さに着目して—

高木 夏海 (大阪教育大学)

1. 目的

2012年4月から全国の中学校における保健体育科で武道必修化となり、多くの生徒が武道を経験することとなった。本研究では中学校体育で最も多く取り扱われている柔道と剣道の授業に着目し、生徒が武道にどのような意識を持ち、授業をどのように感じているかに加え、授業の中で楽しさや嫌さを感じた理由について種目ごとに検証することを目的とした。武道の授業に対する意識を知り、楽しさや嫌さを明らかにすることで、中学生となり多くの生徒にとって初めての経験となる武道授業に価値を見出し、武道嫌い、体育嫌いを作らないための一助とする。

2. 方法

1) 対象者：I 県内公立中学校 4 校に在籍する中学生 1012 名とした。

2) 調査方法：質問紙法により実施し、質問内容は齋藤ら (2015) が使用した「楽しさ」に関する質問 42 設問、「嫌さ」に関する質問 34 設問のうち、柔道・剣道の両方に当てはまる設問のみを一部修正して使用した。フェイスシートは回答者の学年、性別、授業以外での武道経験の有無、授業で行った種目、武道の授業で嫌だと感じたこと、武道の授業で楽しい・面白いと感じたこと、その理由で構成した。

3) 分析方法：有効回答 778 名のデータを IBM SPSS Statistics Version24 に読み込ませ、主因子法バリマックス回転を用いて因子分析を行った。回答者の属性間で比較を行うために、対応のない t 検定を行い、有意水準は 5% 未満とした。武道授業における楽しさ、嫌さを感じた理由について選択回答は種目ごとに棒グラフで表し、自由回答は表とした。

3. 結果および考察

1) 楽しさ

因子分析の結果、「上達実感」、「護身実用」の 2 因子が抽出された。「上達実感」因子では武道経験がある生徒の得点が高く、経験者は武道に対する知識、技術が前もって存在しているため、授業での上達を感じやすいからであると考えられる。また「上達実感」因子において剣道を行った生徒の得点が高かった。これは、柔道は相手をうまく投げきるまで、「できた」という実感が持ちにくいからであると考えられる。それに比べ剣道は打突部位に当たらなくても

竹刀が相手の体に当たることで、打てたという感覚があるからではないだろうか。楽しいと感じた理由のうち最も多かったのは「初めての経験だから」であった。多くの生徒にとって初めて武道に触れるのが中学校の体育であるため、小学校の体育で慣れ親しんだ種目とは異質のものに映り、それが楽しさにつながったと考えられる。「ストレス発散になるから」という回答は、種目間での差が大きく、剣道のほうがストレス発散になると考えている生徒が多かった。

2) 嫌さ

因子分析の結果、「ネガティブ思考」、「相手不満」の 2 因子が抽出され、「ネガティブ思考」因子において学年間、武道経験の有無で有意差がみられた。経験がない、または浅い生徒はできないことや分からないことが多く、経験者との差を感じやすいからであろう。また怪我の心配や身体の痛みによっても考えられる。「ネガティブ思考」因子では種目間でも有意な差がみられた。柔道は身体が防具で守られていないため、投げられたときに痛みを感じやすいからであると考えられる。嫌だと感じた理由では「難しい」が最も多く、新しく伝統的な行動の仕方を学ぶことや道着や防具を身に付けて動くこと、相手と直接組み合う経験がないためと考えられる。そして「危険」という回答が最も種目間での差が顕著であった。

4. 結論

楽しさでは武道経験、種目間によって実践の中で力が出せることの楽しさや、喜びを実感したときの充実度合いに差がみられた。嫌さでは学年間、武道経験、種目間によって武道へのマイナスの考えが大きくなり、取り組みが消極的になる傾向がある。中学生にとって初めて経験する武道は楽しさと嫌さが隣り合わせである。授業の際には、各学年で段階的かつ実戦を取り入れた授業を展開することや武道経験の有無で授業への感じ方に差を出さないこと、相手への遠慮を取り除くための工夫が必要である。

<参考文献>

1) 齋藤正俊、杉山真人、葦原摩耶子 (2017) 学校体育の柔道種目における生徒の認識に関する研究. 国際教育研究センター紀要、3、125-134.